



Data

監督・脚本：石井裕也
原作：早見和真『ぼくたちの家族』
(幻冬舎文庫刊)
出演：妻夫木聡／原田美枝子／池松
壮亮／長塚京三／黒川芽以
／ユースケ・サンタマリア／
鶴見辰吾／板谷由夏／市川
実日子

👁️👁️ みどころ

「昭和の家族」の物語を描いた映画の最高峰は、小津安二郎監督の『東京物語』（53年）だが、弱冠29歳の石井裕也監督が描く「平成の家族」の物語とは？家族の中心にいる母親に「脳腫瘍」と「余命、一週間」宣告が出される中、その夫と2人の息子たちは？

昭和と平成における、郊外に建つ一戸建てのマイホームの異同、親父の権威の異同を考察しながら、男たちが「悪あがき」する姿と、ラストに見る「求心力」の姿に注目！さて、日本アカデミー賞の二連覇は、ありやなしや？



■□■二連覇はありやなしや？石井裕也監督に注目！■□■

私は『川の底からこんにちは』（09年）で石井裕也監督を知り、個人的で才能豊かな若手監督の登場をうれしく思ったが、それには同作で主演した満島ひかりの魅力も大きく寄与していたかもしれない（『シネマルーム25』164頁参照）。なぜなら、続く『舟を編む』（13年）は2014年の第37回日本アカデミー賞で最優秀作品賞をはじめ6部門を総なめにしたが、私の評価はそれほど高くなく、星3つだったから。

つまり、『舟を編む』の評論で、私は「辞書作りにまつわる人間ドラマだけで2時間もたせるのはちょっとしんどい・・・？」（『用例採集』と『語釈執筆』）に見る辞書作りの大変さと面白さはよく表現されているし、『馬締』という奇妙な姓と主人公のキャラも面白いが、それだけでは・・・」と書き、「本作はイマイチ普通の出来・・・？」と評価したため、『シネマルーム30』には未掲載とした。

しかし、それに続く石井監督の本作は、新聞紙上の評論では軒並み評価が高いから、さ

て、日本アカデミー賞での二連覇はありやなしや？

■□■認知症ではなく、脳腫瘍！しかも、余命一週間！■□■

冒頭の、おばさんたち3人が楽しくおしゃべりをしているシーンを観ていると、昨今の国会での「集団的自衛権」をめぐる憲法解釈変更の議論などどこ吹く風。日本はホントに平和でいい国……。そう思うてしまうが、そこでの主婦・若菜玲子（原田美枝子）は少し様子がヘン。日本では、長い間「痴呆」と呼ばれていた病気は、2004年以降は「認知症」と名称変更されたが、この病気はなぜか映画のテーマにしやすらしい。そのため、『私の頭の中の消しゴム』（04年）（『シネマルーム9』137頁参照）、『きみに読む物語』（04年）（『シネマルーム7』112頁参照）、『そうかもしれない』（05年）（『シネマルーム12』343頁参照）、『博士の愛した数式』（06年）（『シネマルーム10』177頁参照）、『明日の記憶』（06年）（『シネマルーム10』172頁参照）、『アウェー・フロム・ハー 君を想う』（06年）（『シネマルーム20』82頁参照）、『アナザー・ハッピー・デイ ふぞろいな家族』（11年）（『シネマルーム30』157頁参照）等々の名作が多いから、本作冒頭を観ていると、つい本作もそんな映画の一つかなと思ってしまった。

ところが、おばさん同士のおしゃべりを終えて、意外に立派な郊外の一軒家に戻ってきたのに、夫の若菜克明（長塚京三）のお迎えも忘れて、1人写真の前に座っている玲子を見ると何かヘン。さらに、長男・若菜浩介（妻夫木聡）の嫁・深雪（黒川芽以）が妊娠したことをみんなで祝うために、双方の家族が集まった食事会での玲子のおしゃべりを聞いていると、さらにヘン。しかして、翌朝、克明と浩介が玲子を連れて病院の診察を受けてみると、その診断は認知症ではなく、何と脳腫瘍！しかも、医師が述べる「一週間」という意味は、何と「余命、一週間」というから、それは一体ナニ！

■□■原作を元に、「家族の物語」に直球勝負！■□■

石井裕也監督は1983年生まれだから、中国では「八〇后」（パーリンホウ）と呼ばれる世代。そんな石井監督に、2011年3月に刊行された早見和真の小説『ぼくたちの家族』が、当時34歳の永井プロデューサーから「企画持ち込み」の形で手渡されたのは、「新しい世代の感覚で正面から家族を描きたい」と思ったかららしい。パンフレットを読むと、7歳の時に母親を病気で亡くした石井監督はその原作を読んで、「僕自身の話だ」と思い、映画化を決定。直ちに脚本を書き始め、19稿まで改訂を重ねて決定稿になったそうだ。ちなみに、石井監督は次男だが、本作の主人公は弟の俊平（池松壮亮）ではなく、兄の浩介になっている。石井監督自身、「兄に対しては言葉にし難い思いがあった」らしいが、さて、その思いとは？そして、本作に見る、兄と弟の確執や距離感とは？

私も母親を昨年亡くしたし、男2人兄弟の弟だから、早見和真の原作や本作の物語は、ある意味「私自身の話」。母親の突然の脳梗塞、余命一週間宣言の直後には、それを聞いて

過剰なほど深刻になる浩介に対して、一見ノー天気でチャランボランに見える弟の俊平が、「兄貴が引きこもりになった時から、とっくにこの家族なんてぶっ壊れてんだ」と本音を告げるシーンがある。それを聞いていると、思わず「同感」と膝を叩きたくなってくる。なぜなら、私が大学生になるまでの私の家族のぶっ壊れぶりだって、同じようなものだったからだ。

若菜家の最大の問題点が、小さな会社の経営者でありながら一家の長としてはいかにも頼りない父親・克明にあることは明らかだが、少し年の離れた長男と次男は今日までそれをどう受けとめながら成長してきたの？また、母親の玲子は都心のアパートで気楽な一人暮らしをしている大学生の俊平からの「小遣い要求」にも気楽に応じていたが、その家計は火の車で、サラ金からの借金が300万もあったことが半明していくからこれも大問題。つまり、郊外のニュータウンに建つ一戸建てのマイホームに住む幸せな4人家族、という一般的なイメージとは裏腹に、若菜家はもともと深刻な問題を抱えていたわけだ。

したがって、今回の玲子の脳腫瘍の発見、余命一週間宣言は、その問題点が一気に噴出するきっかけになっただけのこと。そんな「家族の物語」に石井監督は、大リーグに渡って大活躍中のダルビッシュ有投手や田中将大投手張りに、あるいは、日ハムの大谷翔平投手張りに、本作で直球勝負！

■□■昭和の家族VS平成の家族 そのポイント1は？■□■

昭和の家族の物語を描いた映画の「ベスト1」は、何といっても小津安二郎監督の『東京物語』（53年）。それを60年ぶりにリメイクした山田洋次監督の『東京家族』（13年）（『シネマルーム30』147頁参照）を平成の若者たちはどう観たのかは興味深いが、平成には平成の家族の物語があるはずだ。1960年代の高度経済成長時代を象徴する映画は、植木等主演の『ニッポン無責任時代』（62年）や『日本一の色男』（63年）に代表される、「クレイジー映画」と呼ばれた「サラリーマンもの」。ところが、平成になると、同じ「サラリーマンもの」でも『釣りバカ日誌』シリーズのように、様相が大きく変化してきた。すると、1983年生まれの石井監督が直球勝負で描いた、平成の家族の物語は、昭和の家族の物語とは大きく違うはずだ。

そんな「昭和の家族」VS「平成の家族」という視点から本作を観ると、そのポイント1は若菜家が住む郊外のニュータウンにある一戸建て住宅。少子高齢化が進む日本では、「消滅する市町村」が話題になっているくらいだから、かつてのニュータウンが今やオールドタウン化している。大阪でも、千里ニュータウンは建て替え需要で賑わっているが、泉北ニュータウンの方はサッパリ。しかして、若菜家が住む標準的な一戸建てのマイホームは、東京駅から2時間はかかるはず。また、夫の出勤のためには妻が運転する車での駅までの送迎が不可欠なはずだ。たまたま家の近くに脳腫瘍の患者が入院できる「総合病院」があったのはラッキーだが、なぜ若菜家は平成の時代に多額のローンを負担してまでこんな一戸建て住宅を購入したの？右肩上がりの地価上昇と経済成長が続く時は、ローン付き

のマイホーム購入は有力な選択だが、平成の時代に入った1989年を境として、デフレ構造に転換し、「失われた20年」「失われた25年」が続いてくると・・・。

■昭和の家族VS平成の家族 そのポイント2は？■

昭和の家族には今のような「イクメン主夫」などという軟弱な(?) 観念はなく、一家の主人たる者は会社の仕事はもちろん、夜の宴会から休日のゴルフ接待まで、何でもこなすモーレツ社員が理想。また、妻は夫の留守をしっかりと守り、子供を一流校に入れ、次世代の日本を担う若者に育てるのが任務だった。ちなみに、私の父親はそのような一般的なサラリーマン家庭の父親像とは異なっていたが、「厳格さ」においては全く同じだった。

ところが、本作に見る若菜家の大黒柱・克明は意外にダメ亭主であることが少しずつ暴露されてくる。克明が頼りにするのは、長男の浩介。玲子が脳腫瘍だと聞くとすぐに浩介に電話だし、入院中の細かな段取りから入院費用まですべて浩介におんぶにだっこだから、克明の頼りなさはかなりなものだ。病状が悪化し、夫を誰か別の人と勘違いした玲子が夫の稼ぎが悪いこと、浩介が引きこもりになるとともにパートを辞めたため家計は相当厳しかったこと、ハワイに行く友人が羨ましかったこと等々を楽しそうに喋り始めると、克明たちは・・・? そんな玲子がその後語った、「でもね、お父さんと別れたくないの。辛いけど、あの人のことが好きだから」という本音の一言に男たち3人は一安心だが、克明の頼りなさは本作のラストまで続いていくので、それに注目! 昭和の家族と平成の家族の大黒柱は、こんなにも違うわけだ。

■平成の男たちの「悪あがき」パワーは? ■

中島哲也監督の『渇き。』(14年) でちょっとニヒルで嫌味な刑事役をサラリと演じていた妻夫木聡が、本作では非常事態の中、頼りない父親に代わって若菜家を切り盛りするしっかり者の長男役を、瞬時なりともニコリともせず(?) クールに演じている。長男の嫁と姑はあまりうまくいかないもの。そんな世間の相場どおり、夫の心配事より妊娠したばかりの自分の身体を気遣う浩介の妻・深雪に玲子は不満げ。したがって、その間に立つ浩介は大変だ。そうえ母親のサラ金からの借金が300万円、父親のローンその他の借金が6500万円もあることが判明したから、さて入院代の支払いは・・・? 借金の支払いはいは自己破産すれば清算が可能だが、浩介が連帯保証している分が1200万円もあると・・・?

平成の家族の崩壊は、ここからスタート! そう思っていると、俊平と一緒に上がった丘の頂上で浩介が見せる表情は意外にサバサバしたもので、その顔には微笑みさえも……。そこで浩介が俊平に述べたのは、「俺、悪あがきしてみるわ。まずはお母さん助けなくちゃな」というものだ。「今どきの若者は・・・」というのは、いつの時代でも年長者たちの言いだが、本作ではそれ以降に見せる平成の男たちの「悪あがき」に注目したい。

「当病院では手の施しようがない」「病院のベッドは空けてもらい、自宅で・・・」「再

検査や再治療は自分で病院を探して・・・」。担当医師からそう言われると、普通はそこで諦めるところだが、浩介と俊平は今どきの腐りきったそんな医療体制を打破するべく、ネットや本で調べ、CT写真とカルテを手に片っ端から病院をあたっていくことに。そして、どの病院に行ってもムリだと拒絶される中、ある日俊平が赴いた病院の医師（鶴見辰吾）と、そこから紹介された女医（板谷由夏）の反応は・・・？

■□■やっぱり「遠心力」より「求心力」の方が・・・■□■

2009年8月30日の衆議院議員総選挙に勝利し、「政権交代」を果たした当時の民主党は「求心力」に満ちていたため、寄り合い世帯のボロを出すことが少なかった。しかし、鳩山由紀夫総理の無能ぶり、菅直人総理のわがままぶりが目立ちはじめ、「遠心力」が働きはじめると、民主党はたちまち崩壊した。また、小保方晴子博士がS T A P細胞の発見を公表した当時の理研こと理化学研究所は、S T A P細胞に「求心力」が働いていたため光り輝いていたが、その論文の欠陥が指摘され、「遠心力」が働きはじめると、理研もたちまち崩壊していくことに・・・。

世の中には、そんな現象が多い。したがって、本作前半に見る玲子の発病を契機として若菜家に働きはじめた「遠心力」を見てみると、若菜家もついに崩壊。誰もがそう思うてしまうが、中盤以降の男たちの「悪あがき」

からは、少しずつ「求心力」が働き始めるから、それに注目。もともと、脳腫瘍で余命一週間と診断された玲子が、再診察の結果なお「治療の可能性あり」と診断されたのはラッキーだったが、それは玲子の病の治癒を意味するものではない。楽しそうにフラダンスを踊り、陽気にしゃべりまくる玲子の姿は、死んでしまうよりはましたが、それでもかわいそうなものだ。しかし、ここまでこれたのは、「悪あがき」をした3人の男たちの功績だから、ラストでは浩介の妻・深雪も浩介の努力を高く評価するとともに、自分を反省した姿を見せることに。このように、1つの方向に家族（3人の男たち）が力を合わせて努力し続けたことによって次第に「求心力」が強くなり、最後には再び「家族の絆」を取り戻すことができたわけだ。そう考えると、玲子の脳腫瘍騒動はあながち悪いことばかりではなかったのかも・・・。

小津安二郎監督には遠く及ばないものの、弱冠29歳の石井裕也監督が描いた、そんな平成の家族の物語をじっくり鑑賞するとともに、ラストに見る「求心力」の意味をしっかりとかみしめたい。



発売元・販売元：TCエンタテインメント
(c) 2013「ぼくたちの家族」製作委員会